

聖人と氣の世界

—『管子』のいわゆる「元氣」追求にちなんで—

久富木 成 大

一 氣の動静と聖人の治

(一) 動静

(二) 四時

(三) 君道

二 物の世界と聖人

(一) 「物」の生成

(二) 「氣」の修正

(三) 元氣—水と万物

注
おわりに

はじめに

『管子』の書の世界は、「物」の世界と、「氣」の世界の二つを行き来しながら、展開されている。前者は、現実の目に見える世界であり、後者は形而上の世界であり、常人の感覚ではとらえることのできない世界である。『管子』では、この二つの世界を見すえ、その両方に対応し、それらを統一的に治めることのできる、いわゆる「聖

人」の姿がえがかれている。この聖人の言動は、西暦紀元前七世紀、春秋時代、齊の名宰相として名高い管仲のことに仮託して、そのことが語られることもしばしばである。

見える世界と、見えない世界の、その両方を通じて治める秘訣について、例えば聖人は、「形として人に知られない天の道にしたがうのがよい」（『管子』巻第一 形勢第二）といい、しばしば「今を疑うものは、これも古えに察し、来を知らざるものは、これを往に見る。万事の生ずるや、趣きを異にして、帰を同じくすること、古今一なり」（『管子』巻第一 形勢第二）といっている。形がなく、人に知られることのない天の道にしたがうことと、眼の前に生起する現実のあり方、そこに古今を通じての事理を見出して、それにしたがうこと、この二つの方法が、聖人のなかでは、統一的にとらえられ、処理されている。このことを成り立たせている、『管子』の書の中で展開されている世界には、どのような思想的状況の反映があるのだろうか。小稿では、このような観点から、『管子』の書の述べるところを、分析してみたいと思う。なお、依拠した『管子』の本文は、安井息軒の『管子纂註』本であり、注解は、この『纂註』

と、唐の尹知章の注をとり入れた、清の戴望の『管子校正』とに、主としてよったことをつけ加えておこう。

一 氣の動靜と聖人の治

(一) 動靜

『管子』のなかでは、いたるところで、「動」・「靜」、あるいはまた「動靜」ということについて言及する。例えば、以下のごとくである。

○天時不祥なれば水旱あり、地道宜からざれば飢饉あり。人道不順なれば禍亂あり。此の三者の來るや、政（まつりごと）これを召（よ）ぶなり。曰く、時を審らかにして事を擧げ、事を以て民を動かし、民を以て國を動かし、國を以て天下を動かす。天下動いて、然る後に功名成すべきなり。（天時不祥、則有水旱、地道不宜、則有飢饉、人道不順、則有禍亂、此三者之來也、政召之、曰審時以舉事、以事動民、以民動國、以國動天下、天下動、然後功名可成也）『管子』卷三 五輔第十

冒頭、天時と水旱、ことにその「水」について言及されていることについては後々に問題にすることとし、ここではまず、「時を審らかにする」とのべられているところに注目したい。唐の尹知章はここに注を加えて、「時とは則ち、天祥・地宜・人順の時なり。その時を得れば、則ち事なるべし」といふ。このように、天・地・人に逆らうことなく、いふなれば、仮にそれらに意志があるとすれば、その意志にそうようなかたちで行動したときのみ、天下が動き、も

のごとがうまくいくのであるという。そのため、ここでいう「天下動く」の「動く」は、引用文における、「事を以て民を動かし、民を以て國を動かし、國を以て天下を動かす」というときの「動く」とは、同じではない。同じ「動」という文字であらわされながら、意味するところは、大きく異なっている。つまり、「天下動く」には人間の意志を超えて「動く」という意味がこめられ、他の三例はいずれも、人間の意志によって「動かす」という意味あいが多い。このことはまた、「動」の字の文法上の働きによっても説明できよう。「天下動く」の方は自動詞であり、主語としての「天下」が動くのである、他の三例の「動」は他動詞であって、主語の主君が、目的語である「民」・「國」・「天下」を動かすのである。このように、「天下動く」の場合、文脈上は「天下」が動くのであるが、実はそれは現象上そうしたかたちをとるのであって、この場合の「動く」ことには、さらに別の力が働いているのである。このことについては後にふれるが、ここで我々が注目したいのは、このような性質の「動」であり、「靜」についてであるのである。しばらく、こうした「動」について見ていきたい。

○聖人は徳を上にして功を下にす。……徳と謂ふ所以のものは、動かずして疾く、相告げずして知り、爲さずして成し、召さずして至る。是徳なり。故に天は動かさずして四時下に云（め）ぐり、萬物化し、君は動かさずして政令下に陳して、萬功成り、心動かさずして四肢耳目を使ひて、萬物情あり。（聖人上徳而下功……所以謂徳者、不動而疾、不相告而知、不爲而成、不召而至、是徳也、故天不動、四時下云、而萬物化、君不動、政令陳下、

而萬功成、心不動、使四肢耳目、而萬物情。『管子』卷十戒第二十六)

ここでは、「動」の一つのあり方としての「不動」をとりあげ、それを聖人の行為にことよせて述べている。ここに明らかのように、実は、聖人はこの「不動」というあり方のなかで、非常に多くのことを自然に成しとげているのである。そのさまを比喩的にえがいているのが、「天は動かさずして四時下にめぐり、万物化し、君は動かさずして政令下に陳して、万功成り、心動かさずして四肢耳目を使ひて、万物情あり」という記述である。ここには、「不動」というあり方が、数多くの「動」を、いわば誘い出しているさまがえがかれている。これらの、「四時のめぐり」・「万物の化」・「政令下に陳する」・「万功成り」・「万物情あり」ということが、その誘い出されたものであり、これらはまた、動作やその結果をふくむことから、すべて「動」に属するものと考えてもよいであろう。こうして、「不動」ということが、「動」を、いわば生み出すものとなつているのであるということ。を、右の引用文ではのべているということを認めてもよいであろう。このような「不動」ということは、『管子』のなかでは、「静」という表現で、「動」と対応して使用されてもいる。

○明君は擅(ほしいまま)にする所を知り、患ふる所を知る。國治りて民積むを務むるは、此れいはゆる擅なり。動と静とは、此れ患ふる所たり。是の故に明君は、その擅にする所を審にして、其の患ふる所に備ふるなり。(明君知所擅、知所患、國治而民務積、此所謂擅也、動與靜、此所患也、是故明君審其所擅、以備其所患也)『管子』卷六 法法第十六)

聖人と氣の世界(久富木成大)

右の引用文における「動」と「静」とについて、尹知章の注に「動静の宜しきを失へば、則ち患ひ生ずるなり」とあり、安井息軒は「天下の動と静とに至りては、則ち諸侯のなす所によれば、人君はこれはいかんともするなきなり」と説明している。ここに述べるように、「動」と「静」があるべき状態を失へば、患いのたねとなるのである。王自身が「動」・「静」を正しく守つたにしても、現実の政治の現場をつかさどる、地方の諸侯たちがそれを失うようなことがあれば、それによつて生じた患いを、王といえどもいかんともすることはできないのである。したがって、これによれば、天下のあるじである王でさえも、左右しえないところがあることになり、「動」・「静」には、一般的にいって人為をこえている面があるといつてもよいであろう。こうした「動」と「静」について、さらに見てみよう。

○夫れ神聖は、天下の形を視て動静の時を知り、先後の稱を視て禍福の門を知る。疆國衆ければ、先ず擧ぐる者は危く、後に擧ぐる者は利あり。疆國少なければ、先ず擧ぐる者は王、後に擧ぐる者は亡ぶ。戰國衆ければ、後擧は以て霸たるべし。戰國少なければ、先擧は以て王たるべし。(夫神聖、視天下之形、知動静之時、視先後之稱、知禍福之門、疆國衆、先擧者危、後擧者利、疆國少、先擧者王、後擧者亡、戰國衆、後擧可以霸、戰國少、先擧可以王)『管子』卷九 霸言第二十三)

「動静」ということを、ここでは戦争のことに局限してのべている。「動」とは、敵国に先がけて挙兵し、攻めることをさし、「静」とは、敵の動きをよく見きわめ、いわば防衛の軍として立ちあがり、敵軍の動きに対応することをいう。こうした「動」・「静」は、意識

的なものではなく、当時の国際関係から、自然に生じてくるのである。こうした微妙な「動」・「静」の時は、したがって、通常の間人の知りうることではない。ここでは、それを人智を超えた存在として「神聖」、つまり神や聖人にして、初めてその時を認識しうるのだといっていることに注目しなければならない。同様なことは、また、つぎのようにもあらわされている。

○明主の動靜は理義を得、號令民心に順ひ、誅殺其罪に當り、賞賜その功に當る。(明主之動靜、得理義、號令順民心、誅殺當其罪、賞賜當其功) 『管子』卷二十 形勢解第六十四)

凡庸の主ではなく、明主、つまり聖明の主君でなければ、その政治が、理義になつたものにならないのであるという。聖明の主の動靜が、理義と一致するものであるといっていることに、ここでは注目しなければならない。あるいみで、このように理義そのものともいえるような「動」・「静」は、聖人以外の一般通常の人間には捉え、認識することの出来ないものである。そうした事情の由つてくるところを、『管子』では、以下のようにのべている。

○天地は夫の神の動くごとく、化變する者なり。天地の極なり。能く化と起こる。而して王もちふれば、則ち以て道山(くつ)すべからざるなり。(天地若夫神之動、化變者也、天地之極也、能與化起、而王用、則不可以道山也) 『管子』卷十二 侈靡第三十五)

「動」・「静」は、結局のところ、ここにいうように、天地の「化變」、つまり変化の現象のことであるということになる。しかし、それは単に眼前の感覚でとらえられるところの、現象の世界のことは

かりではない。微妙で、常人の感覚ではとらえられない部分をも含むのである。あるいは、そうした部分こそが本質的なものであるのかも知れない。右の引用文ではそのことを、「天地の変化は、神の動作が変化して予測することができないようなものである」といっている。だからこそ、「動」・「静」の本質的な部分には、常人の感覚では触れることはできない。では、もっとつきつめて、そのような天地の変化の本質的な部分とはいかなるところであろうか。そのことを『管子』では、以下のごとく述べている。

○請ひ問ふ、形は時ありて變ずるか、と。對へて曰く、陰陽の分定まれば、則ち甘苦の草生ず。其の宜しきに從へば、則ち酸鹹和し、而して形色定り、以て聲樂となる。夫れ陰陽進退滿虚は時なし。其散合以て歳を視るべし。唯だ聖人は歳を爲らず。能く滿虚を知るのみ。……且つ夫れ天地の精氣に五あり。……其れ返りて反る、……此れ形の時變なり、と。(請問、形有時而變乎、對曰、陰陽之分定、則甘苦之草生也、從其宜、則酸鹹和焉、而形色定焉、以爲聲樂、夫陰陽進退滿虚亡時、其散合可以視歳、唯聖人不爲歳、能知滿虚、……且夫天地精氣有五、……其返而反、……此形之時變也) 『管子』卷十二 侈靡第三十五)

これは齊の桓公が管仲に対して質問を發し、それに管仲が答えているのである。ここで我々が注目したいのは、「形」の変化の背後に、陰陽五行の氣の、「進退滿虚」あるいは「きわまりて反る」という動きがあるとする管仲の答えである。この「氣」の動きこそが「形」、つまり現象の世界の「動」・「静」の本質的なものであると、管仲はいうのである。

我々はここに至るまで、大は天地よりして、小は万物のすべてに、「動」・「静」つまり変化のあることを、『管子』の記述を引きながら見てきた。「動」・「静」は、結局のところ、現象の世界のものばかりではなく、万物の「形」の背後にあって、常人の感覚を超えたところにある「気」の運動の方が、より本質的なものとして、『管子』のなかでは認められているのだということが明らかとなった。

(二) 四時

ここでは、しばらく感覚の世界、つまり天地万物の「動」・「静」の具体的なものについてとりあげることにする。そうして、その運動の本質をも問題にしてみたいと思う。そこで先ず、四時についてのべることにしたい。

○管子曰く、令は時あり。時なければ則ち必らず天の来るゆえんに視順す。五漫漫、六惛惛、孰かこれを知らんや。唯だ聖人は四時を知る。(管子曰、令有時、無時、則必視順、天之所以來、五漫漫、六惛惛、孰知之哉、唯聖人知四時)『管子』卷十四 四時第四十)

四時、つまり春夏秋冬は、ここでは、「五漫漫」、あるいは「六惛惛」の働きによって生ずるのであるといっている。この「五漫漫」とは、木火土金水の五行の気のはてしなく無限にひろがる働きをいい、「六惛惛」とは、六氣、つまり陰陽風雨晦明の気⑤の、人に知られにくい働きのことをさしているときれている。四時の変化の根源にあると見られる気の動きは、このように「漫」「惛」と形容されるように、常人の感覚でこれをとらえることは不可能であり、それをよくするのは、ここにもいうように、聖人のみとされるのである。こ

うしたことをふまえ、さらに以下のような記述にも注目したい。

○四時を知らざれば、乃ち國の基を失ふ。五稽の故を知らざれば、國家すなはち路(つか)る。故に天を信明と曰ひ、地を信聖と曰ひ、四時を正と曰ふ。(不知四時、乃失國之基、不知五稽之故、國家乃路、故天曰信明、地曰信聖、四時曰正)『管子』卷十四 四時第四十)

ここでいう「四時を知らざれば云々」の、「四時を知る」ということは、四時それぞれの「気」のあり方、動き方を知ることである。その四時は、そうした「気」の動向を通じて、ここに「信明」・「信聖」といわれているように、規則正しいあらわれ方をして移りかわってゆくのである。では、そうした「気」の動きを、さらにこまかく見ていこうと思う。

○是の故に、陰陽は天地の大理なり、四時は陰陽の大經なり。(是故、陰陽者天地之大理也、四時者陰陽之大經也)『管子』卷十四 四時第四十)

天地のあらゆる「気」の正しいあらわれとしての四時、それは結局のところ、その根源のところにおいては、それを陰陽二気の働きとして見る事ができるのであると、ここではいふ。前述のごとく、聖人の智のみがとらえることができる四時の背後にある「気」の動きは、ではいかなる形をとって行われるものと捉えられているのであろうか。そのことを象徴的に語っていると見られる、以下の文章によって、そのことを見ていきたい。

○道は天地に生じ、徳は賢人に出づ。道は徳を生じ、徳は正を生じ、正は事を生ず。是のゆえに聖王天下を治め、窮すれば則ち

反（かへ）り、終れば則ち始る。徳は春に始り、夏に長ず。刑は秋に始り、冬にうつる。刑徳失わざれば、四時一の如し。刑徳郷を離るれば、時乃ち逆行す。事を作してならざれば、必ず大殃あり。月に三政あり。王事必ず理りて以て久長を爲す。中らざる者は死し、理を失ふ者は亡ぶ。國に四時あり。固く王事を執りて、四守所あり、三政執輔す。（道生天地、徳出賢人、道生徳、徳生正、正生事、是以聖王治天下、窮則反、終則始、徳始於春、長於夏、刑始於秋、流於冬、刑徳不失、四時如一、刑徳離郷、時乃逆行、作事不成、必有大殃、月有三政、王事必理、以爲久長、不中者死、失理者亡、國有四時、固執王事、四守有所、三政執輔〓『管子』卷十四 四時第四十）

この引用文の前におかれている文章の冒頭に、「陰陽は天地の大理」（『管子』卷十四 四時第四十）とのべられていたことを想起したい。そうして、ここに今、「道は天地に生じ、徳は賢人に出づ。道は徳を生じ、徳は正を生じ、正は事を生ず」といつている。天地の「動・静」の根源にあるのが、陰陽の氣の運動であり、その運動の正しさを、さきの引用文では「大理」とよび、今ここでは「道」と呼んでいる。この「道」にもとづいて「聖王」は政治を行うのであり、その正しい政治的行為を、ここでは「徳」の名で呼んでいる。その「徳」の行われる、ある一面をとらえて、ここでは「窮すれば則ち反（かへ）り、終れば則ち始る」とのべ、また「徳は春に始まり、夏に長ず。刑は秋に始まり、冬にうつる。刑徳失わざれば、四時一の如し。刑徳郷を離るれば、時乃ち逆行す」といいあらわしている。この、「窮すれば則ち反り、終れば則ち始まる」と、「四時一

の如し」という表現の中に、実は、陰陽の「氣」の動きが象徴的なかたちでのべられているのである。このことの、さらに具体的な様子については、以下に節を改めてみていきたい。

（三）君 道

聖王は、一般人とちがいが、「氣」の動静を知ることができ、それに依拠して政治をとり行うものであるということ、これまで見てきたごとくである。そのような聖人の政治のあり方を、『管子』では、以下のごとく表現している。

○神聖なる者は王、仁智なる者は君、武勇なる者は長たるは、此れ天の道、人の情なり。天道、人情通ずる者は質、寵する者は従、此れ數の因なり。是の故に、患に始むる者は、その事に與らず。其の事を親らする者は、其の道を規せず。是を以て人の上たる者は患ひて勞せざるなり。百姓は勞して患へざるなり。君臣上下の分あきらかなれば、禮制立つ。是の故に人を以て上に役し、力を以て明に役し、刑を以て心に役す。此れ物の理なり。心道は進退して刑道は滔趕す。進退は制を主とし、滔趕は勞を主とす。勞を主とする者は方に、制を主とする者は圓なり。圓なる者は運び、運ぶ者は通ず。通ずれば和ぐ。方なる者は執る。執る者は固し。固ければ信なり。君は利を以て和し、臣は節を以て信あり。上下邪なし。（神聖者王、仁智者君、武勇者長、此天之道、人之情也、天道人情通者質、寵者従、此數之因也、是故始於患者不與其事、親其事者、不規其道、是以爲人上者、患而不勞也、百姓勞而不患也、君臣上下之分素、則禮制立矣、是故以人役上、以力役明、以刑役心、此物之理也、心道進退、

而刑道沿赶、進退者主制、沿赶者主勞、主勞者方、主制者圓、圓者運、運者通、通則和、方者執、執者固、固則信、君以利和、臣以節信、則上下無邪矣。『管子』卷第十一 君臣下第三十一

「神聖なるものは王」と、先ずいっている。こうした聖王は、ここにいうように「天道」と「人情」に通じているのであり、そのために、その政治は君臣上下の分が確立している。そのことが、ここでは「礼制立つ」と表現されている。そうして、このような政治はまた、「物の理」にしたがったやり方であるといっている。この、「物の理」に従った政治の一端として、「制を主とする」ということになっている。これは具体的には、どのようなことをいうのであろうか。尹知章はここに「君の心の進退は、制命をなすを主とするゆえんなり」という。安井息軒は、「物を制するを主とる」と注している。こうした注解を手がかりにして考えると、君の心の進退、つまり心の作用は、物の理をつかさどるものであるということができよう。この、物の理をつかさどるということは、物のあるべき姿に、そのものを従わせるということである。この章の冒頭での話題に関連させて考えれば、その物の動静に、その物をそわせるといふことに外ならない。こうしたことを確認し、引用文を読みすすめると、「制を主とするものは円」という表現にいきあたる。これはどのように理解すべきであろうか。尹知章は、「円は君道をいふ」と、ここに注を加えている。したがって、「制を主とするものは円」というのは、聖王の政治のあり方を、あるいはまた理想的な君道のあり方を、具体的に、形を円にかりて比喻し、描写したものであるといふことができるであろう。さきに我々は、陰陽の気の動きが四時に擬せられている事実の

あったことを見てきた。物の動きの根源に陰陽の気があり、その物の動きを、物本来の動きにそわせることを任務とする聖王のあり方が、ここに見たように、円という形に象徴して表現されているのである。これはとりもなおさず、物の動静と、聖王のあり方の一致していることを、ここから言おうとしているのであると考えるべきであろう。聖王の政治の本質が、したがって円、つまり円環的なものと分かちがたくむすびついているのである。物の動静をつかさどることが、君道の大きな部分を占めていることは、さきに見た、「制を主とす」という文章に明らかである。円環の様相を本質として行われる聖王の政治は、物の動静そのものの根源の動きそのもの、つまり「気」の動きと矛盾するものではない。だからこそ、引用の文章では以下のようにいう。「円なるものは運び、運ぶものは通ず。通ずれば和（やわら）ぐ」と。その政治のどここおりなく、平和な様子のをべているのである。尹知章もいうように、「君道は円である」という考えは、聖王の政治が、「気」の動きを、あくまで尊重したものであるということを物語っているのである。こうしたことから、陰陽の「気」の動きが、「窮り、反る」・「終り、始まる」と表現されたら、また春夏秋冬の四時の移りかわりになぞらえたりすることがあったのであるが、それらはいずれも、この「気」の動静、つまり動きが、円環の運動をするものとして、とらえられていたことのあるらわれであったのである。

「気」の世界は、物の世界とちがって、一般の人間には見ることでできない世界である。「気」の世界の動静を、聖人はどのようにして見ることができ、それにいかに対応し、ここに述べたような円環

の相の認識に達しえたのであろうか。以下にこうしたことについて、章を改めて考えてみたい。

二 物の世界と聖人

前の章において、「亟りては反る」^⑨などと表現されることなどを手がかりにして、陰陽の氣の動きが円運動のかたちをとって行われているという『管子』の書の見解を見てきた。ここでは、そのような立場をとったばあい、現実の「物」の世界のこととして、必然的にどのようなことがおこったのかということと、それがまた、「氣」の世界にどのように反映したのかというような点について考えてみたい。

(一) 「物」の生成

「物」とは、そもそも何であり、どのようにして生じたものであるかということなど、「物」についての根本的な問題について、まず考えてみることにする。

○管子曰く、道の天に在るものは日なり。其の人に在るものは心なり。故に曰く、氣あれば生し、氣なければ死す、と。生するものは、その氣を以てなり。（管子曰、道之在天者日也、其在人者心也、故曰、有氣則生、無氣則死、生者以其氣。『管子』巻四 樞言第十二）

「故に曰く」につづく、「氣あれば生し、氣なければ死す」の部分は、管子が当時のことわざや、あるいはまた、人々のあいだで言いならわされていた言葉を引用しているのであろう。ここでいうよう

に、氣は、物の生死を決する、重大なものとしてとらえられている。^⑩氣はこのように大切なものであると考えられているのであるが、生命のあるものだけが氣と、このように深くかわるとされていたのであろうか。

○凡そ萬物は陰陽兩生して參視す。^⑪（凡萬物、陰陽兩生、而參視。『管子』巻四 樞言第十二）

ここに、「万物は陰陽兩生云々」といつている。この部分を『管子集校』の編者の一人、郭沫若は、「陰陽は兩なり。相い合して化生す。生ずる所の物は、即ち參たり」という。^⑫陰陽の兩氣によって第三のものが生ずるのであるという。このように、「物一般」が、すべて陰陽二氣の結合によりできているということが、当時の考えとして有った可能性が高いのである。そうした立場からすれば、「物」とは、「氣」から出来ているのだということになる。ではそれらの物、つまり万物はどのように存在しているのであろうか。

○天の裁は大、故に能く萬物を兼覆す。地の裁は大、故に能く萬物を兼載す。人主の裁は大、故に物を容るること多し。而して衆人比（したし）むを得。故に曰く、裁大なるものは、衆のしたしむ所なり、と。（天之裁大、故能兼覆萬物、地之裁大、故能兼載萬物、人主之裁大、故容物多、而衆人得比焉、故曰裁大者、衆之所比也。『管子』巻二十 形勢解第六十四）

ここで、天・地・人主について、それぞれ「裁」ということをいつている。この「裁」については、「裁は制なり」という解がある。こうした立場からすると、「裁」には、制約ないしは制限というような意味が出てくる。したがって、天・地・人主は、万物に制約を与え、

支配するということになる。そのことがかえって万物にとって都合がよく、うまくいくという。具体的には、天に覆われ、地に載せられ、その天地の間で人主に制約支配されることによって、万物は繁栄し、繁殖するのであるというわけである。物は、このように天・地・人主からそれぞれ直接あるいは間接に制約を受けてこそ、存続しうるのであると、とってもよい。そう解することが不自然でないほどに、万物と、この制約制限とはきりはなせない。このような制約を受けた在り方、それこそが物そのものの存在の仕方であると考えられていたのである。では、そのような「裁」とは、具体的にどのようなものであったのであろうか。

○天の度を失へば、満つといへども必ず涸る。……その功、天に順ふ者は、天これを助け、その功、天に逆ふ者は、天これにそむく。天の助くるところは、小なりといへども必ず大に、天のそむくところは成るといへども必ず敗る。天にしたがふ者は、その功あり、天に逆ふ者は、その凶をきたし、またすくふべからざるなり。(失天之度、雖滿必涸、……其功順天者、天助之、其功逆天者、天違之、天之所助、雖小必大、天之所違、雖成必敗、順天者、有其功、逆天者、懷其凶、不可復振也)『管子』卷一 形勢第二

万物の受けるもろもろの制約のうち、ここでは天の制約である、「天の度」ということについて述べている。万物が存在してゆくためには、この「天の度」に従わなければならない。この「天の度」にしたがうかぎりにおいて、物は天の助けを得て発展する。ところが、「天の度」に反すれば、その物は亡んでしまうのであると述べら

れている。こうした天の制約に関連したことを、また、つぎのようにもいあらわしている。

○道を聞きて好く天下をおさむること有る者は、天下の人なり。道を聞きて好く萬物を定むることある者は、天地の配なり。道ゆく者は、その人來ることなく、道來る者は、その人ゆくことなし。道の設くる所は、身の化なり。(有聞道而好爲天下者、天下之人也、有聞道而好定萬物者、天地之配也、道往者、其人莫來、道來者、其人莫往、道之所設、身之化也)『管子』卷一 形勢第二

まずはじめに、「道を聞いて万物を定むること有るものは、天地の配なり」と述べている。この意味は、道理にしたがって、天に覆われ、地に裁せられて存在する万物を安定させることの出来るものは、天地と対等の存在であるということである。右の引用文にいうところの「道」とは、ここに意味をとらえて「道理」といいかえたが、結局のところ、さきにもべたことのある、天・地・人主の、あの万物に対する「制約」に相当する。その「制約」を、あるいみで一般化したのべたものといいかえてもよい。また、こうした「道」と、やはり同じ働きをするものを、つぎのようにより具体化していることもある。

○法は禮より出で、禮は治より出づ。治禮は道なり。萬物は治禮を待ちて而る後に定まる。(法出于禮、禮出于治、治禮道也、萬物待治禮、而後定)『管子』卷四 樞言第十二

さきには「天の度」といい、「道」といったが、ここでは、おもに君主の政治にかかわる、「法」・「礼」・「治」についていう。この「法」・

「礼」・「治」といえども、やはり「道」に由来するのであるが、これらが君主の手によってあやつられ、そこで初めて万物が安定させられるという。

陰陽二氣によって生じた「物」は、天と地の間に万物として存在する。しかし、万物が万物として存在するためには、天・地・人それぞれに由来する、ある種の制約に従わなければ、その存在をつづけることができないとされていた。その制約は、これまで見てきたように、「裁」・「天の道」・「道」・「法」・「礼」等々、さまざまの名で呼ばれている。こうしたものは、結局のところ、陰陽の氣のあり方を、あるいはまた陰陽の氣の運動を、あるべきよりよい姿へと導くための「道」ともなるものである。それらによって、陰陽二氣の化合によって生じた「物」が、それぞれよりよく存在し、安定させられると、みなされているからである。

ここで我々は、かつて第一章で見てきたところの、物の動静というものは、結局、田環的運動の相のもとに行われているのだという、『管子』における、あの見方を想起しなければならない。そうして、ここにいう、陰陽二氣の、いわば通り道としての「道」や「裁」などを、これに対応させて考えてみることも必要となるであろう。物と氣とは、一方が「形」あるものとして万人の経験できる世界のことであるにしても、形而上の「氣」の世界とは無縁なものではないというのが、『管子』の書の立場であったからである。「万物は陰陽両生して参視す」（『管子』巻四 樞言第十二）といっていたことを、ここで再確認しなければならぬ。したがって、結局のところ、万物のあり方を正しくするためには、聖人にしか認識できないとされ

た、あの氣の世界における、氣の動きを、正しい円運動の相に整えることであるということになるのである。いずれにしても、問題は氣の世界のこととなるのであるから、聖人がそこに、唯一の氣の世界の認識者として注目されるのは、当然のこととなるであろう。

（二）「氣」の修正

ここでは、聖人が「氣」の世界に、いかに対処しているのかというところを見ていきたい。そのために、聖人というものを、『管子』がいかにとらえているのかということをも、まず確認しておこうと思う。

○聖人を賢美とする所のものは、其の變と随って化するを以てなり。淵泉にして盡きず、微約にして流れ施く。是を以て徳の潤澤を流すも、均しく萬物に加はる。故に曰く、聖人は天地に参す、と。（所賢美於聖人者、以其與變隨化也、淵泉而不盡、微約而流施、是以徳之流潤澤、均加于萬物、故曰、聖人參于天地）

『管子』巻四 宙合第十一

聖人の賢美のさまを、ここでは「淵泉にして尽きず、微約にして流れ施く。是を以て徳の潤澤を流すも、均しく万物に加わる」、という。ここには、聖人そのもののイメージを、泉流そのものに依拠して発想しているところがあるのであるが、そのことについては、のちにふれるであろう。さしあたって、ここでは、聖人が「天地と参す」、つまり、天地と並ぶ存在であるということに注目したい。では、なぜ天地と並ぶ資格があるのかといえば、それは「万物に徳を加える」、という点においてである。では、そのような「徳」というのは、具体的にはどういうことになるのであろうか。

○然らば則ち、春夏秋冬は將に何をか行はんとす。東方を星と

曰ふ。其時を春と曰ふ。其氣を風と曰ひ、風は木と骨とを生ず。その徳は羸を喜びて節時を發出す。其事の號令には、神位を修除し、弊梗を謹禱し、陽を正すを宗とす。……其時を夏と曰ふ。其氣を陽と曰ふ。陽は火と氣を生ず。其徳は施舍樂を修む。其事は號令賞賜、爵を賦し、祿を受け郷を順にし、謹みて神祀を修む。功を量り、賢を賞し、以て陽氣を動かす。……其の時を秋と曰ふ。其氣を陰と曰ふ。……其徳は憂哀、靜正嚴順。……旅を順にして聚收し、民資を量りて以て畜聚し、彼の羣幹を賞し、彼の羣材を聚む。百物乃ち収まり、民をして怠る毋らしむ。惡む所其れ察し、欲する所必らずう。我れ信なれば則ち克つ。此を辰徳と謂ふ。辰は収を掌る。収を陰と爲す。……其時を冬と曰ふ。其氣を寒と曰ふ。寒は水と血とを生ず。その徳は淳越、溫恕周密。その事の號令には、徙民を修禁して靜止せしむ。地乃ち泄れず、刑を斷じ罰を致して、有罪を赦すなく、以て陰氣に符す。(然則春夏秋冬將何行、東方曰星、其時曰春、其氣曰風、風生木與骨、其徳喜羸、而發出節時、其事號令、修除神位、謹禱弊梗宗正陽、……其時曰夏、其氣曰陽、陽生火與氣、其徳施舍修樂、其事號令賞賜、賦爵受祿順郷、謹修神祀、量功賞賢、以動陽氣、……其時曰秋、其氣曰陰、……其徳憂哀、靜正嚴順、……順旅聚収、量民資以畜聚、賞彼羣幹、聚彼羣材、百物乃収、使民毋怠、所惡其祭、所欲必得、我信則克、此謂辰徳、辰掌収、収爲陰、……其時曰冬、其氣曰寒、寒生水與血、其徳淳越、溫恕周密、其事號令、修禁徙民、令靜止、地乃不泄、斷刑致罰、無赦有罪、以符陰氣。』『管子』卷十四 四時第四十)

聖人と氣の世界(久富木成大)

右に引いた文章においては、聖人が四時、つまり春夏秋冬におこなった、氣をめぐる政治的行為について、述べている。春には、「陽を正すを宗とす」といい、夏には、「以て陽氣を動かす」といい、秋には、前後と少しくおもむきを異にするものの、類似のこととして「収を陰となす」といい、冬には、「以て陰氣に符す」と、それらをのべている。

まず、春のこととしての「陽を正すを宗とす」ということについて、みてみよう。これは聖王が、神々の祭位の乱れを正し、祭礼を整えることによつて、神々の働きを助けることをいう。そうすれば、神々が、陽氣のふさがりやとどこおりを無くし、陽氣本来の正しい状態にかえしてくれるのだとされている。つぎの、夏の「陽氣を動かす」というのはどういうことであろうか。陽氣は、一般に仁愛の氣配がつよく、あたたかい傾向のある氣であるとされている。そのため聖王たるもの、民に恩賞を大いに施し、仁政を行えば、それが結果的に陽氣の動きを助け、強化することになるといふ。ついで、秋のこととしていわれている、「収を陰となす」ということは、どういふことであろうか。秋の氣である陰氣は、ふつう、万物を取蔵することをつかさどる氣であると見なされている。⑩のために、聖王はその氣の働きに沿うかのごとく、「彼の群材を聚む。百物乃ち収む」といふようなことを行う。このことによつて陰の氣の働きが活発となり、その季節の正しいあり方が定まるのである。さいごに、冬のことには「以て陰氣に符す」というが、このことの意味するところを考えてみたい。この時期、聖王は厳しい刑罰を罪人に対して執行するのであると、右の引用文ではのべている。こうすることによつ

て、陰氣のもう一つの働きである厳しさを、存分に發揮させることを、やはり助けることになるのであるといふのである。こうして、聖王の四時の行為を見わたしてみると、その政治は時節の変化に応じて行われているとされていることがわかる。つまり、聖王の行動は、その時節における氣の動きと同一のものであることを志向し、それに沿って行うことがよいとされていることになる。こうした聖王の、氣の動きに類似した行為が、氣の動向を、その本来の運動のあり方にむけてある程度助けるものであると見なされていることに對しては、十分な注目がなされなければならない。このことについては、また、後にふれるであろう。

聖王の行為は、こうして、時節の変化とともに、それに随順して行われるのが理想とされていたということがわかった。しかし、四時の移りかわりが、つまり自然の変化ということが、常のあり方に反して起こることがないわけではない。いわゆる異常氣象の一つとして、そうしたものがあつたわけである。例えば以下のごとくであるが、それには聖王としては、どのように対応するのであろうか。

○春凋（しば）み、秋榮（はなさ）き、冬雷あり、夏に霜雪あるは、此れみな氣の賊なり。刑徳、節を易（か）へ次を失へば、則ち賊氣すみやかに至る。賊氣すみやかに至れば、則ち國に菑多し。是の故に聖王は、時を務めて政を寄せ、教を作りて武を寄せ、祀を作りて徳を寄す。此の三者は、聖王の天地の行（おこなひ）に合するゆえなり。（春凋秋榮、冬雷、夏有霜雪、此皆氣之賊也、刑徳易節失次、則賊氣逃至、賊氣逃至、則國多菑、是故聖王、務時而寄政焉、作教而寄武焉、作祀而寄徳焉、

此三者、聖王所以合於天地之行也』『管子』卷十四 四時第四十）

このような異常な氣象の状況は、どのようにして生ずるのであると考えられていたのであろうか。ここでは、「皆、氣の賊なり」とこたえられている。これに對して、「氣が時に反すれば、則ち賊害をなすなり」という旧注の解釈がある。したがって、異常氣象は、天の動きに反するかたちで氣が動いた結果生じたところの、一種の災害であると考えられていたことがわかるのである。では、なぜそのような状況が生じたのであろうか。それはここにもいつているように、「刑徳、節をかえ、次を失つた」からであるといふ。つまり、失政がそれを招いたのであるといふ。いうまでもなく、ここには、政治が時節に順応して規則正しく行われるべきだとする、あの時令思想が色こく影を投げかけてはいる。しかし、『管子』の書の場合、政治そのものの位置づけが、必ずしも時に随従するものとはばかりはなされておらず、非常に積極的な役わりを与えられている。そのいみで、單純に時令思想のわくの中でとらえきれない部分があるといふべきであろう。例えば、以下のごとき記述に注目してみたい。

○夫れ陰陽進退滿虚は時なし。其の散合以て歳を視るべし。唯だ聖人は歳を爲らず、能く滿虚を知るのみ。餘滿を奪ひて不足を補ひ、以て政事を通じ、以て民常を贍す。地の變氣は、その出づる所に應ず。水の變氣は、之に應ずるに精を以てし、之を受くるに豫を以てす。天の變氣は、之に應ずるに正を以てす。（夫陰陽進退滿虚亡時、其散合可以視歳、唯聖人不爲歳、能知滿虚、奪餘滿、補不足、以通政事、以贍民常、地之變氣、應其所出、

水之變氣、應之以精、受之以豫、天之變氣、應之以正』『管子』
卷十二 侈靡第三十五)

異常気象は、前述のごとく、「氣の賊」ということによつておこるのであったが、それをここでは、「変氣」ということはいいあらわしている。そうした変氣を、右の引用文では、地水天に分け、地の變氣・水の變氣・天の變氣に分けている。そのうえで、ここではそうした變氣に対応する方法を述べているのである。では、地の變氣にはどのように対応するのがよいのであろうか。それを、「法を設けて、以て之を禳(はら)う」と、ここではいつている。「禳」とは、變異を払いきよめる祭りのことで、その變氣の生じた土地で、そのような祭礼をとり行うわけである。また、水の變氣に應ずるには、「精誠を以てす」というように、誠心誠意、心を正しくして、物事に対処すべきであるとされている。それでもその變氣が無くならなければ、「須らく、預(あらかじめ)これを防備する所あるべし」という。これは、水の變氣のもたらす水害などにそなえて、あらかじめ堤防などを整備し、その氣の作用を受けて立ち、やがてその衰えを待つのである。天の變氣に対しては、ひたすら行いを正し、徳をおさめ、自然にその氣のおさまるのを待つのであると述べられている。こうしてみると、聖人は、宗教的、倫理的、政治的な努力によつて、變氣に対応し、異常気象の被害を防ぎ、やわらげることができるとみられていたということがわかるであらう。では、なぜ聖人はそのようなことができるのであろうか。『管子』ののべるところにしたがつて、みていきたい。

○夫れ天地の精氣に五あり。必ずしも沮を爲さず。其れ亟りて反

聖人と氣の世界(久富木成大)

る、其の重骸動毀の進退は、即ち此れ數の得難き者なり。此れ形の時變なり、と。平氣の陽を沮せば、若(したが)ふこと、辭靜の如くす。餘氣の潛然として動き、愛氣の潛然として哀むは、胡ぞ得て動を治めん、と。對へて曰く、之を衰時に得たり。位して之を觀れば美を怡(とど)め、然る後に輝きあり。之を心に修め、其れ殺して以て相待つ。故に滿虛哀樂の氣あるなり。(夫天地精氣有五、不必爲沮、其亟而反、其重骸動毀之進退、即此數之難得者也、此形之時變也、沮平氣之陽、若如辭靜、餘氣之潛然而動、愛氣之潛然而哀、胡得而治動、對曰、得之衰時、位而觀之、怡美、然後有輝、修之心、其殺以相待、故有滿虛哀樂之氣也)『管子』卷十二 侈靡第三十五)

すでに前にのべたように、氣そのものはここにいうように、「亟りては反る」という、自己運動をおこなっている。さきにあげた變氣は、この運動からはずれた動きをしているものである。しかし、その常に反する氣の動きは、「數の得がたきなり」といわれているように、常人にはつかみがたく、知りたいものである。それをどのようにして知り、なおかつその氣の動きに対応できるのであろうか。当然のことながら、右の引用文では、斉の桓公が、このことを管仲に問い正している。「氣の動きは見るべきでないではないか。どうして氣の動きをコントロールできるのか」と、それに対して管仲はつぎのように答えた。「氣の動きの盛んなときは見えにくいので、氣がおとろえ、動きがゆるやかなときをまたなければならぬ。そのようなとき、五氣の一つ一つをよく観察し、善美なものだけを留めるようにする。そうしてはじめて氣候が和し、調(ととの)い、

万物が立派に、あるべき姿をとるようになる」と。さらにまた、管仲はいう。「邪氣」がなお盛んであれば、ますます徳を修め、その徳の力によって邪氣を滅殺し、その氣の衰えるのを待たねばならない」と。

聖王は、このように氣の動きをとらえ、それを政治的・宗教的・倫理的な努力、手段によって、その動きを助長したり、抑制したりすることができるものと見なされていたことがわかる。こうして、聖王は、『管子』の書のなかでは、氣の動きをある程度自由に操作する力量のある存在としてえがかれているのである。では、『管子』におけるこのような聖人の姿には、どのような思想史的事情が反映されているのであろうか。章を改めて考えてみたい。

(三) 元氣——水と万物

すでに見てきたように、天に覆われ、地に載せられて万物は存在しているというのが、『管子』の書でしばしば述べられている、万物のあり方であった。そのようにして在る万物が、どのようにして出来てきたのかということも我々はすでに確認しているのであるが、そのことをまた、つぎのような文章によって確かめてみたい。

○凡そ物の精、此れ則ち生を爲す。下は五穀を生じ、上は列星となる。天地の間に流（し）く。これを鬼神といふ。胸中に藏す、これを聖人といふ。このゆえに民氣臯乎として天に登るが如く、沓乎として淵に入るが如く、渟乎として海に在るが如く、卒乎として己れに在るが如し。このゆえに此の氣や、止むるに力を以てすべからずして、安んずるに徳を以てすべし。呼ぶに聲を以てすべからずして、迎ふるに音を以てすべし。敬守して失ふ

勿き、是を成徳と謂ふ。徳成りて智出で、萬物ごとく得（う）。
（凡物之精、此則爲生、下生五穀、上爲列星、流於天地之間、謂之鬼神、藏於胸中、謂之聖人、是故民氣臯乎、如登於天、沓乎如入於淵、渟乎如在於海、卒乎如在於己、是故此氣也、不可止以力、而可安以德、不可呼以聲、而可迎以音、敬守勿失、是謂成徳、徳成而智出、萬物果得。『管子』卷十六 内業第四十九）

この引用文の冒頭にいう「物の精」について、以下のような解釈がある。「物の精とは、陰陽二氣なり。推してこれを原（たず）ぬれば、これを道といふ。すべて物はここより生ず」と。このように、陰陽二氣を、「万物ごとく得」というようにして、万物は生じてくるといふのが、『管子』の書のなかでのべられている、一般的な考えであったのである。この氣によって生じた具体的なものは、ここでは五穀・列星というようなものがあげられている。これらは、いずれも形体をそなえ、目で見ることのできるものである。しかし、それらのものの根源となつている「氣」は、ここでも「鬼神」と表現され、あるいは又「臯として天に登るがごとく、沓として淵に入るがごとく、渟として海にあるがごとく」などと書きあらわされているように、人間の感覚を超えた存在であったのである。このように、人間の感覚をこえたものであるところの「氣」によって、感覚でとらえられる「物」の世界が生まれているのだという考え方が、定まった型として確立していたのである。

しかしながら、物の本源と、そこから生まれた「物」とのあいだに、以下にのべるような別の考え方もあったのである。それについ

て見てみなければならぬ。

○地は萬物の本原、諸生の根苑なり。美惡・賢不肖・愚・俊の生ずる所なり。水は地の血氣、筋脈の流通の如き者なり。故に曰く、水は材を具ふるなり、と。何を以てその然るを知る。曰く、夫れ水は渾弱として以て清く、而して好んで人の惡を瀦（あら）ふは仁なり。之を視るに黒くして白きは精なり。之を量るに概を使ふべからざるも、滿に至りて止むは正なり。唯だ流れざるなく、平に至りて止むは義なり。人皆高きに赴く、己れ獨り下（ひく）きに赴くは卑なり。卑なる者は道の室、王者の器なり。而るに水以て都居となす。準なる者は五量の宗なり。素なる者は五色の質なり。淡なる者は五味の中なり。是のゆえに水は萬物の準なり。諸生の淡なり。違非得失の質なり。是のゆえに滿たざるなく居らざるなきなり。天地に集り萬物を藏し、金石を産し、諸生に集る。故に曰く、水は神なりと。草木に集まれば、根その度を得、華その數を得、實その量を得。鳥獸これを得て形體肥大、羽毛豐茂、文理明著なり。萬物その幾を盡し、其常に反らざる莫き者は、水の内度適すればなり。（地者萬物之本原、諸生之根苑也、美惡賢不肖愚俊之所生也、水者地之血氣、如筋脈之流通者也、故曰水具材也、何以知其然也、曰夫水渾弱以清、而好灑人之惡、仁也、視之黑而白、精也、量之、不可使概、至滿而止正也、唯無不流、至平而止義也、人皆赴高、己獨赴下卑也、卑也者、道之室、王者之器也、而水以爲都居、準也者、五量之宗也、素也者、五色之質也、淡也者、五味之中也、是以水者、萬物之準也、諸生之淡也、違非得失之質也、是以無不滿、

無不居也、集於天地、而藏於萬物、產於金石、集於諸生、故曰、

水神、集於草木、根得其度、華得其數、實得其量、鳥獸得之、形體肥大、羽毛豐茂、文理明著、萬物莫不盡其幾、反其常者、水之内度適也。『管子』卷十四 水地第三十九

これまで、万物の本原が「氣」であるとする見解を、くりかえし見てきた。しかし、右の引用文においては、万物の本原を地、つまり土地であるという。これまでの、「氣」の占めていた位置を、新たに土地が占めることになるのである。そうして、水を、万物の本原である土地の血脈であるという。ここでいう血脈とは、土地を人体になぞらえたときの、血液に相当するであろう。本原である土地に對して、水の占める重大な位置づけも、このことによつてわかるのである。右の引用文においては、水のこのような大きな役わりにかれでもするかのように、主体であるはずの土地についての言及は忘れられ、もっぱら、水について語られるようになっていく。具体的にいえば、「水は材を具ふる」ということの説明に重点が推移するのである。この、「水は材を具ふる」ということの意味は、どのようになるのであろうか。それは、「水氣通ぜざれば、則ち地朽ち、以て万物を生ずる能はず。故に曰く、水は衆材を具備するなり」という注釈によつて明らかとなる。結局、水が、地の生死のかぎをにぎっており、それだけの大きな能力を持っているというわけである。そのことを明らかにしようとして、右の引用の文においては、水が万物に入りこみ、万物に生命を与えているさまを、つぎつぎにあげていくのである。そのため、叙述が以下のごとくになってゆくのも、ふしぎなことではない。

○具とは何ぞや。水これなり。萬物以て生きざるなし。唯だその託を知る者は、能くこれが正をなす。具は水これなり。故に曰く、水とは何ぞや、萬物の本原なり。諸生の宗室なり。美惡賢不肖愚俊の産する所なり、と。何を以てその然るを知る。夫れ齊の水は道躁にして復す。故に其民貧蠱にして勇を好む。楚の水は淖弱にして清し。故に其民は輕果にして賊なり。越の水は濁重にして泊、故に其民愚疾にして垢し。秦の水は汨最にして穢、淤滯して雜、故に其民貧戾にして罔、而して好く齊を事とす。晉の水は枯旱にして運り、淤滯にして雜。故に其民諂詐を葆ち、巧佞にして利を好む。燕の水は萃下にして弱、沈滯して雜。故に其民愚慧にして貞を好み、輕疾にして死を易（あなど）る。宋の水は輕勁にして清し。故に其民簡易にして正を好む。是のゆえに聖人の世を化するや、其解は水に在り。故に水一なれば則ち人心正し。水清ければ則ち民心易し。一なれば則ち欲汚されず、民心易ければ則ち行邪なし。是のゆえに聖人の世を治むるや、人ごとに告げざるなり。戸ごとに説かざるなり。其樞は水に在り。（具者何也、水是也、萬物其不以生、唯知其託者、能爲之正、具者水是也、故曰、水者何也、萬物之本原也、諸生之宗室也、美惡賢不肖愚俊之所産也、何以知其然也、夫齊之水、道躁而復、故其民貧蠱而好勇、楚之水、淖弱而清、故其民輕果而賊、越之水、濁重而泊、故其民愚疾而垢、秦之水、汨最而穢、淤滯而雜、故其民貧戾、而好事齊、晉之水、枯旱而運、淤滯而雜、故其民諂諛葆詐、巧佞而好利、燕之水、萃下而弱、沈滯而雜、故其民愚慧而好貞、輕疾而易死、宋之水、輕勁

而清、故其民簡易而好正、是以聖人之化世也、其解在水、故水一則人心正、水清則民心易、一則欲不汚、民心易、則行無邪、是以聖人之治於世也、不人告也、不戸説也、其樞在水」『管子』卷十四 水地第三十九)

ここで注目したいのは、「水とは何ぞや。万物の本原なり」諸生の宗室なり」ということばである。そうして、このことばは、さきに、万物の本原が土地であるとのべたあの文章が、「美惡・賢不肖・愚・俊の生ずる所なり」とつづいたのと同じように、「美惡・賢不肖・愚・俊の産する所なり」と一字を異にするのみの、同じ意味の文章につづいてゆくのである。当時、万物の根源を求めるところがあり、その二つの立場の結論を、ここでは列挙しているのであるが、記述の多寡という点からしても、その力点のおき方からしても、水こそが万物の根源であるとする考え方が、有力であったことが推測されるのである。これは、先ほどからの水重視の観点からしても、当然のことであろう。こうして、ここにのべるように、あたかも宗家からつぎつぎと分家が分かれて生じてゆくと同様にして、水から万物が生じてゆくのであるというのである。

水が万物の根源の一物であるところから、万物を治める原理が水そのものの中に存在するであろうと考えられるのも当然のことである。そのことを、右の引用の文では、「是のゆえに聖人の世を化するや、其解は水に在り」といい、また、「是のゆえに聖人の世を治むるや、……其の樞は水に在り」といつている。万物が水から生じた以上、水に万物を万物たらしむる原理がそなわっており、その原理にしたがって万物を治めようと考えられるのも、自然のなりゆきで

あろう。では、水にそなわっている、原理というのはどのようなものであるというのであろうか。

○善く國を爲（をさ）むる者は、其國の財を守り、之を湯（うごか）すに高下を以てし、之に注ぐに徐疾を以てせば、一以て百となるべし。未だ嘗て民に籍求せずして、使用河海の若く、終れば則ち始るあり。此を物を守りて天下を御すと謂ふ、と。（善爲國者、守其國之財、湯之以高下、注之以徐疾、一可以爲百、未嘗籍求於民、而使用若河海、終則有始、此謂守物而御天下也
『管子』卷二十四 輕重丁第八十三）

「物」を守って、天下を治めることの原理が、「河海」にある、終始ということにあると、ここではいふ。河川が海に入り、海から水蒸気となって雲雨が生じ、それが河川に注ぐ。それがまた海に入るといふように、そこには終始反復の相がある^⑧。この終始反復ということは、第一章ですで見たと、「物」の動静としての、その根源にある「氣」の「亟りては反る」という運動と、軌を一にするものである。こうしたことから考えて、「河海」、つまり水のそなえる原理から、物の世界を見るという見方が、『管子』の書のなかにはあるといふことがわかるのである。このことは、「物」の世界のことを、「水」のそなえる性質によって理解し、規定しようという立場につらなるであろう。さきの引用文にあった、「聖人の世を化すや、その解は水にあり」とか、「聖人の世を治むるや、……その樞は水にあり」といふことばも、ここに至って、その意味が、さらに明白となってくるのである。

「物」の世界のことを、水の原理で理解するということは、実は

聖人と氣の世界（久富木成大）

『管子』の書の中では、非常に徹底しておこなわれているのである。現実の、人間の感覚でできる「物」の世界ばかりではなく、その背後にあるとされる「氣」の世界にまでも、それは及んでいる。ここで、我々は、「賊氣」あるいは「変氣」に対応するために、陰陽の氣を、聖人が「殺（さい）」することなどをして、自由に制御する場面のあったことを、ここに想起したい。例えば、そこには、「水の変氣」に対応することがあった。そうして、そのことについて「水の変氣は、これに應ずるに精を以てし、之を受くるに予を以てす」とのべられていた。この「予を以てす」というのは、堤防などを増強したりして、予め、水の変氣の作用としての水害にそなえ、その氣の衰えを待つのであった。こうしたことから、聖人の、いわゆる「治氣」の活動には、現実の世界、物の次元における、治水のイメージが相当に多く寓せられ、そこを発想の根源にしているということが予想されるのである。

水を万物の根源の一物質として考える考え方が、『管子』のなかにあるということも、これまで見てきた。おわりに、そのことを、万物の靈長とされる人間においてみておきたい。

○人は水なり。男女精氣合して、水形を流（し）く。……是の以（ゆえ）に水は……凝蹇して人と爲りて、九竅五慮出づ。此れ乃ち其精なり。精麤濁蹇、能く存して亡ぶ能はざる者なり。（人水也、男女精氣合、而水流形、……是以水……凝蹇而爲人、而九竅五慮出焉、此乃其精也、精麤濁蹇、能存而不能亡者也）『管子』卷十四 水地第三十九

人間も、結局のところ、水によって生じているという。そのこと

を、右の引用文においては「人は水なり」とのべ、ついで「男女精氣合して、水形を流（し）く」といつている。尹知章の注ではここを「陰陽交感し、流布して形を成す」と説明している。つまり、尹知章は、「物」としての水の根源を、陰陽の「氣」の世界に求めて、そこから発想しているのである。しかし、右の引用の文章は、物の本源を氣の世界に求めていない。万物の根源を水であるとする考えの中で、人間をも万物の一つとして、扱っているのである。引用の本文で、「男女の精氣云々」というところの、「氣」の字を欠くテキストも有るのである。「水」を万物の根源の一物質と考える立場からすれば、ここに「氣」の字を欠く方がよいであろうし、あるいはその方が、より古い『管子』のテキストの面目を伝えていくのかも知れない。しかし、現実に「氣」字を、ここに有するテキストが多いということにも、それなりの注目がはらわれなければならない。つまり、「氣」の世界と、「水」の世界とは、『管子』の書においては、必ずしも次元を異にしているものであるということである。これが『管子』の書のすべてではないが、少なくとも、聖人のこととして言及される治氣の行為の発想に、そのことが色こく反映しているように思われる。「氣」の世界のことが、「水」の世界のことに、深く関連して考えられていたことを、我々はすでにこの章で見えてきている。右の引用文でいう「男女の精氣云々」において、「氣」字の有無は、その意味において、実は大きな違いを持たないともどもいえるであろう。

おわりに

現実の「物」の世界と、形而上の「氣」の世界は、一般の人間にとっては、別々の、次元を異にする世界である。しかし、聖人にとってはそうではない。「物」の世界の背後には必ず「氣」の世界があり、その「氣」の世界の円運動が、「物」の世界の動静を規定するものであることを聖人は知っていたとされている。そうして、そのような聖人は、「物」の世界の混乱を、「氣」の世界の運動の乱れとしてとらえ、その乱れを修正する術をそなえた人物として『管子』のなかでは描かれている。

一方、『管子』の書では万物の根元を求めて、それを土地であるとし、やがて水であるとする考えに、それが展開していったことがべられている。いわばこれは、古代中国におけるいわゆる、万物の本原の追求の一つの成果といえるであろう。しかし、この万物の本原の追求は、一般的には有形のものを越えたところにある、無形のところに、それを求めるといふ方向をとることが多い。具体的にいえば、有形のものの背後に陰陽二氣を考え、その上でその二氣を統べる一氣が何であるかということを問題にするのであり、ふつうこれを「元氣」の追求と呼んでいる。時代からいえば漢代でのことである。こうした「元氣」の追求という段階からすれば、『管子』の書における、万物の本原を現実の物の段階での一物である水に求める立場は、それほど大きな意味は持たないといえるであろう。しかしながら、こうして生じた「水」への深い関心は、新しい時代思潮

としての、「氣」の世界のことに大きな影響を与えたのである。戦国時代は陰陽五行思想のさかんになった時代であり、『管子』の書も、ほぼそのころのことを多く反映しているであろう。すでに見てきたように、陰陽五行の「氣」の世界は、目で見、耳で聞くなどの感覚をこえた世界のことである。陰陽五行思想の流行は、形ある世界から形の無い世界へと人々をさそいこむことであり、あるいみで精神世界に大きな混乱をもたらす出来ごとであったのである。『管子』の書で見たように、聖人はこの氣の世界を感覚し、氣そのものの動きを操作することさえする。そうした聖人の、いわゆる治氣の行為には、治水の実施からくる行動の方式をかいま見ることができたのであった。『管子』の書のなかでは、元氣を追求して、「水」を得たのであるが、その「元氣」としての「水」の原理で、陰陽五行の氣の世界をも、統一的にとらえているということができるのである。陰陽五行の氣の流行による精神世界の混乱と不安も、このことによつて、ある程度まで整序されたということができようであろう。それは一に、『管子』の書のなかのべられている、いわゆる元氣追求の結果としての、水の発見の功に帰せられるべきものである。

- ①時則天祥地宜人順之時也、得其時則事可成。なお、『管子』の旧注については、その作者に関して房玄齡と尹知章との二説がある。例えば『四庫全書』では、舊有房元齡註、晁公武以爲尹知章所託、然考唐書藝文志、元齡註管子不著錄、而所載有尹知章註管子三十卷、則知章本未託名、殆後人以知章人微、元齡名重、改題之以炫俗耳」（『四庫全書總目提要』十九 子部 法家類）という。小稿でも尹知章説に拠ることにする。
- ②動靜失宜、則患生也。

聖人と氣の世界（久富木成大）

③一七九九年〜一八七六年。『管子』の注釈に『管子纂註』二十四巻がある。なお『管子纂註』は版本のほか、今、富山房の漢文大系（二十一）に収入されている。

④謂五行之時也、其時之氣不能必、則爲沮敗也。尹知章注。

⑤『左伝』昭公元年に、「六氣曰陰陽風雨晦明也。分爲四時、序爲五節」という。なお杜預の注に「六氣之化、分而序之、則成四時、得五行之節」とある。

⑥君心進退、所以主爲制令。尹知章。主制物。安井息軒。

⑦圓、謂君道。

⑧注⑦。

⑨『管子』 侈靡第二十五。

⑩沫若案、古本劉本朱本亦有「生者以其氣」五字、以下文「治者以其名」例之、當有此五字。宋楊忱本無。『管子集校』上187頁。

⑪ここに引用した句、および本文の、この句につづく「先王因其參而慎所入所出」の句については、『管子集校』上191頁〜192頁参照。

⑫沫若案、陰陽「兩」也、相合而化生、所生物即爲「參」。『管子集校』上192頁。

⑬安井息軒『管子纂註』。

⑭一本に「天下之配」に作るものがある。『管子集校』では、黃震・王念孫・尹桐陽の説をあげて、「天地之配」に作るべきであるとする。意味は、尹桐陽によると、「天地之配」猶上云「天地之匹」であるとする。（『管子集校』上32頁）。

⑮時方開通而有弊敗則禱神以通道之。尹知章注。

⑯陽氣主仁、故行恩賞以助之也。尹知章注。

動、鼓動之也。『管子纂註』。

⑰陰氣、掌收藏萬物。『管子纂註』。

⑱陰氣主殺、故斷刑致罰以符之。尹知章注。

符者、輔也。『管子纂註』。

⑲氣反時、則爲賊害也。尹知章注。

⑳各々の時節により、行うべき制度が確立し、定まっているとする思想。そこに

は、帝王が曆法・陰陽五行の氣の動きなどをもとにして自然の変化をとらえ、それに人事を随従させるといふ基本的な性格がある。

⑲ 謂地見災變之氣、應其所出之處、設法以禳之。『尹知章注。』

⑳ 禳については、『周礼』卷八「天官女祝に「掌以時招梗禳之事、以除疾病」といふ、鄭玄の注に「卻變異曰禳、禳攘也」といふ。

㉑ 水見災變之氣、則當應之以精誠、其祥不弔、當受之者、須預有所防備之也。『尹知章注。』

㉒ 天見災變之氣、唯守正以應之也。『尹知章注。』

正行修徳、天變自消。『管子纂詁』。

㉓ 氣候之動難知者也、故曰胡得而治動。『尹知章注。』

㉔ 治動之法、得之徂氣衰徳之時、就五氣之位、而觀察之、留其美、使之不前去、然後氣和候調、物有光輝也。『管子纂詁』。

㉕ 邪氣猶盛者、益修之心、其滅殺之、以待其氣之衰也。『管子纂詁』。

㉖ 陰陽の氣を操作し、その乱れを調和させることは、『管子』の書のひとつどの部分の成立よりはるかに後に、漢代に入ってから、天人相関の思想が形成されて行くなかで、確立された。『尚書』周官篇に「陰陽を變理す（變理陰陽）」と述べられている。しかし、この周官篇は四世紀初め、東晉の元帝のとき梅賾が奏上した、いわゆる偽古文に属するものである。これら偽古文の諸篇は、清朝に入ってから、その偽作であることが証明されたのである。

㉗ 物之精、陰陽二氣也。推而原之、謂之道、凡物生於此。『管子纂詁』。

㉘ （水者地之血氣、其流通地中、如筋脈之流通人之體中、筋脈不通則人死）、水氣不通則地朽、不能以生萬物、故曰、水具備衆材也。『管子纂詁』。

㉙ この「使用若河海」について、近人、馬非百（元材）はその著『管子輕重篇新註』（中華書局 一九七二年刊）において、「言取之不盡、用之不竭」（683頁）注（二七）と、その不尽性をいい、「終則有始」についてはその同著書において、「故善爲天下者、必通於終則有始之理、而繼續施行其輕重之策」（568頁）注（一五）といひ、その継続性を指摘する。しかし、ここは更に一步をふみこんで、小稿が第一章でふれたところの、反復性・円環性という点からも考えてみ

るべきであらう。

㉚ 第二章第(二)節。

㉛ 羅根澤は、その論文「管子探源」（人民出版社、一九五八年刊『諸子考索』所収）において、「水地第三十九——漢初醫家作」といふ。しかし、ここでのべられている医学思想も、陰陽五行思想も漢初まで下げる必然性はない。また、羅氏は、水地篇でとりあげられている諸国のうち、越に關しては、他に列挙されている国々と同列にあつかわれるのは、やはり漢初以後のことであるといふ。しかし越は春秋末から相当に有力になっており、勾踐（B.C.496—B.C.465）の時には列国に伍していたのである。そうしてまた、この篇でのべられている、水を万物の根源とする思想など、その篇の成立はともかくとして、述べられている事自体は、かなり古い時代のことと核となつてみるとよい。

㉜ 陰陽交感、流布成形也。

㉝ 維通案、御覽人事部一引無「氣」字。『管子集校』下686頁。

㉞ 例えば、そのことの証しとして、「精氣」を液体、つまり「精液」とする見方も成りたつのである。そのような立場になつたものとして、以下のような解釈がある。「男女精氣云トハ、男女ノ精液合構シテ、人體ヲナスヲ云フ」『漢文大系』『管子纂詁』欄外注。

㉟ 這種以有固定形体的物質爲万物本原的朴素唯物主義學說、因爲与中国哲學的基本假設——只有無形的東西才能充當万物的本原——相矛盾、所以并未有發展。不過、它对元氣論也產生了一些影響。程宜山『中国古代元氣學說』41頁。一九八六年、湖北人民出版社刊。

㊱ 羅根澤は、「管子探源」において、陰陽家および『管子』の書の成立について、以下のごとく述べている。「陰陽家言、肇戰國以至嬴秦統一之時、而盛於西漢……」、また「都管子八十六篇、亡者十篇、著作年代、早在戰國、晚在漢初文景武昭之世、惟幼官圖似在漢後、但止此一篇耳」（『諸子考索』499頁）、と。